

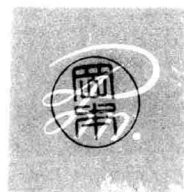
定本
步七捕物帳

定本半七捕物帳

第三卷

岡本綺堂著
早川書房刊

定本 半七捕物帳 第三卷 七百五十円



著作岡本綺堂・刊行早川清・印刷株式会社浩文社岡橋清治・製本明光社製本所矢野克明・昭和四十一年二月二十八日印刷発行
発行所東京都千代田区神田多町二丁目二番地株式会社早川書房

半
七
捕
物
帳

第
三
卷

目

次

張子の虎	7
海坊主	32
旅絵師	60
雷獣と蛇	86
半七先生	108
松茸	134
人形使ひ	162
冬の金魚	187

少年少女の死	215
異人の首	232
一つ目小僧	258
仮面	271
柳原堤の女	283
むらさき鯉	330
三つの聲	356
解説	379

張子の虎

一

四月のはじめに、わたしは赤坂をたづねた。

「陽気も大分ばか付いて、そろ／＼お花見気分になつて来ましたね。」と、半七老人は半分あけた障子のあひだから麗かに晴れた大空をみあげながら云つた。「江戸時代のお花見といへば、上野、向島、飛鳥山、これは今も変りがありませんが、御殿山といふものはもう無くなつてしまひました。

昔はこの御殿山がなかく賑はつたもので、こゝは上野と違つて門限もない上に、三味線でも何でも弾いて勝手に騒ぐことが出来るもんですから、去年飛鳥山へ行つたものは、今年は方角をかへて御殿山へ出かけるといふ風で、江戸辺の人たちは随分押出したもんです。それについても色々お話がありますが、けふはお花見が題ぢやあないんですから、手つ取り早く本文に取りかゝることにしませう。併しまんざらお花見に縁のないわけではない。その御殿山の花盛りといふ文久二年の三月、品川の伊勢屋……と云つても例の化伊勢ではありません。お化が出るとか云ふのが売物で、むかしは妙な売物があつたもんですが、それが評判で化伊勢と云つて繁昌した店がありました。その

お化の伊勢屋とは違ひます。……その店で二枚目を張つてゐるお駒といふ女が変死した。それがこのお話の発端です。」

お駒は今年二十二の勤め盛りで、眼鼻立ちは先づ普通であつたが、ほつそりとした瘦形の、いかにも姿の好い女で、この伊勢屋では売れつ妓のひとりに数へられてゐた。かれが売れつ妓となつたのは姿が好いばかりでなく、品川の河童天王のお祭に自分の名を染めぬいた手拭を配つたばかりでなく、ほかにもつと大きい原因があつて、宿場女郎とは云ひながら、品川のお駒の名は江戸中にきこえてゐたのであつた。

彼女がそれほど高名になつたのは、恰も一場の芝居のやうな事件が原因をなしてゐるのであつた。万延元年の十月、けふは池上の会式といふので、八丁堀同心室積藤四郎がふたりの手先を連れて、早朝から本門寺界限を檢分に出た。やがてもう五つ（午前八時）に近いころに、高輪の海辺へさしかゝると、葭簀張りの茶店に腰をかけて、麻裏草履を草鞋に穿きかへてゐる年頃二十七八の、小粋な男があつた。藤四郎はそれにふと眼をつけると、すぐ手先どもに頤で知らせた。

藤四郎の眼にとまつた彼の男は、石原の松蔵といふ家尻切りのお尋ね者であつた。かれは詮議がだんくに厳しくなつて來たのを覺つて、どこかへ高飛びをする積りであるらしい。飛んだところで思ひも寄らない拾ひ物をしたのを喜んだ手先どもは、すぐにばらくと駈けて行つて、彼のうつむいてゐる頭の上に御用の声を浴せかけると、松蔵は今や穿かうとしてゐた片足の草鞋を早速の眼つぶしに投げつけて、腰をかけてゐた床几を蹴返して起つた。それと同時に、かれの利腕を取らう

とした一人の手先は、あつと云つて倒れた。松蔵はふところに呑んでゐた短刀をぬいて、相手の横鬢を斬り払つたのであつた。眼にも止らない捷業に、こつちは少しく不意を撃たれたが、もう一人の手先は猶豫なしに飛び込んで、刃物を持つたその手を抱へ込まうとすると、これも忽ち振り飛ばされた。さうして左の眉の上を斜めに突き破られた。

一人は倒れる。ひとり流れる血潮が眼にしみて働けない。今度は自分が手を下す番になつて、藤四郎はふところの十手の服紗を払つた。御用と叫んで打ち込んで来る十手の下をくゞつて、松蔵は店を駆け出した。片足は草履、片足は草鞋で、かれは品川の宿をさして逃げてゆくのを、藤四郎はつゞいて追つた。藤四郎はもう五十以上の老人であつたが、若い者とおなじやうに駆けつゞけて、品川の宿まで追ひ込んでゆくと、松蔵ももう逃げおほせないと覚悟したらしい、急に振り返つて執念ぶかい追手に斬つてかゝつた。

両側の店屋では皆あれ／＼と立ち騒いでゐたが、一方の相手が朝日にひかる刃物を真向にかざしてゐるので、迂濶に近寄ることも出来なかつた。短刀と十手がたがひに空を打つて、二三度入れ違つたときに、藤四郎の雪駄は店先の打水に滑つて、踏み堪へる間もなしに小膝を突いた。そこへ付込んでひと足踏み込まうとした松蔵は、俄によるめいて立ちすくんだ。頭の上の二階から重い草履がだしぬけに飛んで来て、かれの眼をしたゝかに撲つたのであつた。立ちすくむ途端に、かれの足は藤四郎の十手に強く打たれた。これ以上は説明するまでもない。松蔵の運命はもう決つた。

草履の主は伊勢屋のお駒であつた。かれは朝帰りの客を送り出して、自分の部屋を片附けてゐると、表に捕物があるといふ騒ぎに、ほかの翫輩達と一緒に表二階の欄干に出てみると、恰もこゝの

店さきで十手と短刀とが閃いてゐる最中であつた。かれらは息をのんで瞰下してゐると、捕手の同心が打水に滑つて危く倒れかゝつたので、お駒は思はず自分の草履を取つて、一方の相手の顔に叩きつけた。その眼つぶしが効を奏して、おたづね者の石原の松藏は両腕に縄をかけられたのである。この時代でも捕方に助勢して首尾よく罪人を取押へたものにはお褒めがある。その働き方に因つては御褒美も下されることになつてゐた。ましてお駒は男でない、賤しい勤め奉公の女として、当座の機転で罪人を撃ち悩まし、上に御奉公を相勤めたること近ごろ奇特の至りといふので、かれは抱へ主附添ひで町奉行所へ呼び出されて、錢二貫文の御褒美を下された。

遊女が上から御褒美を貰ふなどといふ例は極めて少い。殊にそれがいかにも芝居のやうな出来事であつただけに、世間の評判は猶さら大きくなつた。一度は話の種にお駒といふ女の顔を見て置かうといふ若い人達も大勢あらはれて、お駒を買ひに来る者と、ほかの女を買つてお駒の顔だけ見ようといふ者と、それやこれやで伊勢屋は俄に繁昌するやうになつた。それはお駒が二十歳の冬で、それから足かけ三年の間、かれは伊勢屋の福の神としていつも板頭か二枚目を張り通してゐた。そのお駒が突然に冥土へ鞍替へをしたのであるから、伊勢屋の店は引つくり返るやうな騒ぎになつた。土地の素見の大哥たちも眼を皿にした。

お駒は寢床のなかで絞め殺されてゐたのであつた。それは中引け過ぎの九つ半(午前一時)頃で、その晩のお駒の客は三人あつたが、本部屋へ這入つたのは芝源助町の下総屋といふ呉服屋の番頭吉助で、かれは店者の習ひとして夜なかに早帰りをしなければならなかつた。いつもの事であるから相方のお駒も心得てゐて、中引け前にはきつと起して帰すことになつてゐたのであるが、その晩は

お駒も少し酔つてゐた。吉助も酔つて寝込んでしまつた。吉助は夜なかにふと眼をさまして、喉が渴くまゝに枕もとの水を飲んで、それから煙草を一服すつたが、二階中はしんと寢静まつて夜はもう餘ほど更けてゐるらしい。これは寢過したと慌てて起き直ると、いつも自分を起してくれるはずのお駒は正体もなく眠つてゐた。

「おい、お駒。早く駕籠を呼ばせてくれ。」

云ひながら煙管を煙草盆の灰吹きでぽんと叩くと、その途端に彼は枕もとに小さい物の影が忍んでゐるのを発見した。うす暗い行燈の光でよく視ると、それは黄色い張子の虎で、お駒の他愛ない寝顔を見つめてゐるやうに短い四足をそろへて行儀よく立つてゐた。宵にこんな物はなかつた筈だがと思ひながら、彼はそれを手に取つてながめると、虎は急に眼がさめたやうに不恰好な首を左右にふら／＼と揺がした。しかしお駒は醒めなかつた。彼女はいつのまにか冷くなつて永い眠りに陥つてゐるのであつた。それを発見した吉助は張子の虎を投げ出して飛び起きた。かれは頭へ声で人と呼んだ。

大勢が駈け集つてだん／＼詮議すると、お駒は何ものにか絞め殺されてゐることが判つた。正体もなしに酔ひ臥してゐた吉助は、そばに寝てゐるお駒がいつの間に死んだのかを知らないと言つた。しかし一つ部屋に居合はせた以上、かれは無論にそのかゝり合ひを逃れることは出来ないで、諸人がうたがひの眼は先づ彼の上に注がれた。場所といひ、事件といひ、主人持ちの彼に取つては迷惑重々であつたが、よんどころない羽目と覺悟をきめたらしく、かれは檢視の終るまでおとなしくそこに抑留されてゐた。

伊勢屋の訴へに因つて、代官伊奈半左衛門からの役人も出張した。夜のあける頃には町与力も出張した。品川は代官の支配であつたが、事件が事件だけに、町方も立会つて式のごとくに検視を行ふと、お駒はやはり絞め殺されたものに相違なかつた。かれの首にはなんにも巻き付いてゐなかつたが、おそらく手拭か細紐のたぐひで絞めたものであらうと認められた。本部屋にゐた吉助は勿論、名代部屋にゐたお駒の客ふたりは高輪の番屋へ連れてゆかれた。

二

「半七。一つ骨を折つてくれ。伊勢屋のお駒にはおれも縁がある。不憫なものだ。早くかたきを取つてやりてえ。何分たのむ。」

半七は、八丁堀同心室積藤四郎の屋敷へ呼び付けられて、膝組みで頼まれた。藤四郎は一昨年の一件があるので、お駒の変死については人一倍に氣を痛めてゐるらしい。それを察して半七も快く受合つた。

「かしこまりました。精一ばい働いてみませう。」

半七はすぐに引つかへして品川の伊勢屋へ行つた。かれは若い者の与七を店口へよび出して訊いた。

「どうも飛んだ事が出来たね。名物のお駒を玉無しにしてみましたと云ふぢやあねえか。」

「まったく驚きました。」と、与七も凋れ返つてゐた。「御内証でもひどく力を落しまして、まあ死

んだものは仕方がないが、せめて一日も早くそのかたきを取つてやりたいと云つて居ります。」

「それやあ誰でもさう思つてゐるんだ。取分けて上から御褒美まで頂戴してゐる女だから、草を分けてもその下手人を捜し出さにやあならねえ。ところで、素人染みたことを云ふやうだが、そつちにはなんにも心当りはないかえ。」

「それで困つてゐるんです。なんと云つても下総屋の番頭さんに目串をさゝれるんですが、あんな堅い人がよもやと思ふんです。気でもちがへば格別、別にお駒さんを殺すやうなわけもない筈ですから。」

「それやあ傍からは判らねえ。一体その番頭といふのはどんな奴だえ。」

与七の説明によると、下総屋の番頭吉助はもう四十近い男で、酒は相當に飲むが至極おとなしい質の上に、金遣ひも悪くないので、お駒も大事に勤めてゐる馴染客であつた。三月になつてゆふべ初めて来たので、お駒と別に喧嘩をしたらしい様子もなく、いつもの通りおとなしく寢床に這入つたのである。一緒に寝てゐる女の死んだのを知らないと言ふのは、いかにもうしろ暗いやうにも思はれるが、酔ひ倒れてゐたとあれば無理はない。おそらく二人が正体もなく寝入つてゐるところへ、何者かが忍び込んでそつとお駒を絞め殺したのではあるまいかと与七は囁いた。商売柄だけに彼の鑑定もまんざら素人でないことを半七も認めた。

「そこで、こゝの家でお駒と一番仲の好いのは誰だえ。」

「お駒さんは誰とも美しく附合つてゐたやうですが、一番仲好くしてゐたのはお定といふ下新造のやうでした。お定は丁度去年の今頃からこゝへ来た女で、お駒さんとは姉妹のやうに仲好くしてゐ

たと云ふことです。それですからお定は今朝から飯も食はずにぼんやりしてゐますよ。」

「ぢやあ、そのお定をちよいと呼んでくれ。」

眼を泣き腫らしたお定が店口へおづ／＼と出て来た。お定は二十五六で、色のあさ黒い、細おもての力んだ顔で、髪の毛のすこし薄いのを瑕きずにして、どこへ出しても先づ十人以上には踏めさうな中年増であつた。半七からお駒の悔みを云はれて、かれは涙をほろ／＼こぼしながら挨拶してゐた。

「お前はお駒と大麥仲好しだつたと云ふが、今度の一件について何か思ひ当ることはねえかね。」

「親分さん。それがなんにもないんです。わたくしはまるで夢のやうで……。」と、お定はしやくりあげて泣き出した。

「それやあ困つたな。お駒の枕もとに何か張子の虎のやうなものが置いてあつたと云ふが、それやあほんたうかえ。」

お定は黙つて泣いてゐると、与七は傍から代つて答へた。

「ありました。小さい玩具おもちゃのやうなもので、それは御内証にあづかつてあります。お目にかけませうか。」

「むゝ、見せて貰はう。」

半七は上り口に腰をおろすと、与七は一旦奥へ行つたが又すぐに出て来て、兎も角もこちらへ通つてくれと招じ入れた。奥へ通ると、主人夫婦は陰つた顔をそろへて半七を迎へて、かの張子の虎といふを出してみせた。虎は亀戸みやげの浮人形のたぐひで、背中に糸の穴が残つてゐた。半七